令和６年度第３回伊賀市文化振興審議会　議事録

■日　時／　令和７年２月 10 日（月）午後２時 00 分～午後４時 20 分
■場　所／　伊賀市役所本庁舎４階　406 会議室
■委員

学識経験者		中川　幾郎	帝塚山大学　名誉教授	欠席
文化関係団体	俳句文学関係	植田　美由喜	芭蕉翁顕彰会	出席
	美術関係	津田　義夫	市展「いが」運営委員会	出席
	音楽関係	鳥居　明夫	伊賀コミュニティオーケストラ	出席
公共的団体等	教育関係（小・中学校）	辻　晃子	校長会	出席
	福祉関係（保育･幼児教育）	中　恵	伊賀市社会事業協会	出席
	福祉関係	田邊　寿	伊賀市社会福祉協議会	出席
専門知識を有する者	文化財関係	福田　良彦	伊賀市文化財保護審議会	出席
	産業関係	藤川　直紀	上野商工会議所	出席
公募市民		服部　晶子		出席

事務局
［伊賀市企画振興部］風隼部長、佃次長
　［文化振興課］西村課長、奥田主幹、井田主任、髙井主任
　［美術博物館建設準備室］馬場室長
［公益財団法人伊賀市文化都市協会］服部参事
　［事業課］山口副課長、杉本主幹

■内　容
１　あいさつ
２　報告事項
⑴　ヒアリングについて
⑵　子どもが出会う文化についてのアンケートについて
３　協議事項
⑴　今年度と今後の取り組みについて
⑵　ロゴマークについて
⑶　伊賀市文化振興プラン後期実行計画について
４　その他
・伊賀市からの報告
　芭蕉翁生誕 380 年記念事業

■議事録

1　あいさつ

副会長	会長欠席のため、代わって進行を務める。積極的な発言をお願いしたい。

2　報告事項

（1）ヒアリングについて

事務局	（1）ヒアリングについて （資料1に基づき、ヒアリング、企業アウトリーチ事業について説明）
副会長	意見をお願いする。
委員	伊賀の伝統的工芸品の教育を小中学生にしていただいていることはありがたい。伊賀焼は、学校へ順番に出向き実施しているようだが、ある学年になったら市内すべての子どもが作陶体験できるよう、学校と受け入れ調整をし、市として計画できるとよい。伊賀くみひもは、伊賀伝統伝承館で体験しているようだが、道具や説明を運び、学校で体験することはできないか。体験施設まで遠い学校もあり、くみひも協同組合と調整し、出張体験ができるとよいと思う。 読み聞かせ、本物のオーケストラを聞く機会、獅子舞のイベントのような伊賀の魅力を発信できるイベントなど、自分たちで行ける人たちは参加できるが、そうでない人もいる。学校にお世話をかけるが、公平に体験できるよう出前授業を検討してほしい。校長会でも伝えてほしい。
副会長	受け手の学校側は、どのように考えているか。
委員	伊賀焼の体験は、多くの小学校で学年を決めて体験していると思う。くみひもの体験をしている学校もある。中学校の美術の授業で、工夫してくみひも作りを行っていた。近々予定している大阪交響楽団のアウトリーチ事業を、とても貴重な機会として楽しみにしている。
副会長	企業は、どのように考えているか。
委員	企業にアウトリーチを行うこともよいことである。文化政策は人権政策であるとするプランの内容を確認したい。
事務局	文化に触れる権利は基本的人権であるという考え方。すべての人が持つ権利。 市では、伊賀市人権学習企業等連絡会の事務局もあるので、その考え方をこれからも周知できたらと思う。
委員	企業の従業員や子どもが体験できることは、貴重である。今年の研修視察は、芭蕉翁生誕380年記念の年だったので、芭蕉の内容とした。関係各所と調整し、いろんな団体の人と一緒に体験できた。文化に触れるイベントを体験するためには、リーダーの意識が大事。企業にはチャレンジ精神が大切で、体験は企業にとって共鳴を作り出し、運営のためにも重要である。
副会長	企業において、ぶんとのアウトリーチや芭蕉翁顕彰会の句会などしていただいている。この審議会の取り組みの成果が少しずつ浸透してきていいると感じる。

（２）子どもが出会う文化についてのアンケートについて

事務局	（２）子どもが出会う文化についてのアンケートについて （資料２に基づき、子どもが出会う文化についてのアンケートについて説明）
副会長	アンケート結果は、少しずつプラスということで推移している。 意見があればお願いしたい。
委員	アンケートの回答率が 27%。ここに現れない家庭の子どもたちにどうアプローチするかが課題。アンケートに回答した家庭の多くは、文化的な取り組みに積極的と考えるが、回答がない家庭の子どもたちにアプローチすることが大切。 人材不足も課題。大阪の交響楽団を呼ぶことも大切だが、地元の文化が大切。地元に、趣味でも高い技術を持つ人がいる。待ってないでこちらから行くことも大切。できる限り人材を登録し、１年に１回は学校へ派遣すべき。組織的な配置が大事。
副会長	アウトリーチからもう一歩先へ何ができるかが大切。
委員	委員の意見に同感。すべての子どもに行きわたるように参加できることが大切。 地域ではいきいきサロンがあり、社会福祉協議会から無料で講師にきてもらっている。これは大人の公民館活動の一つ。公民館がしているような文化的な人材バンクは、文化振興課が主導して行うべき。ネットワークの核となる組織が必要。パイプ役となる組織を作り計画を立てるのが文化振興課で、組織を立ち上げないと動かない。
副会長	プランの後期計画にも関わるような話であった。
委員	質問の問４について、習い事が主になっているが、学校での文化的な取り組みを保護者はどれぐらい知っているのか。どのように情報を周知するか。文化施策にお金を使っていることを発信することも大切。 結局は人づくりであり、経験を持って教えることである。福祉教育は人づくりと考えている。文化振興計画で色んな具体的な内容をうったっているので、効果が出て来たのではないか、伊賀市の取り組みは先を行っている、評価できると思っている。
委員	子どもたちに伊賀に残ってもらうためには、ふるさとを愛する子どもを育てること、子どもの頃から伊賀の魅力を知ることが大切。伊賀学ジュニア検定を学校で受け入れてほしい。身近なところから伊賀の魅力を知ってほしい。

３　協議事項

（１）今年度と今後の取り組みについて

事務局	（１）今年度と今後の取り組みについて （資料３に基づき、今年度と今後の取り組みについて説明）
副会長	本年度の取り組みを踏まえて、後期計画を進めていくということでよいか。 報告事項の中でも、みんなが参加できるべき、地域との連携などのキーワードが見えている。具体的な提案があればお願いする。
委員	子どものアンケートの問４で半数以上の人が「あまりない」との回答だった。文化に触れる機会は必要。家庭環境に恵まれている人は自主的に行けるが、それ以外の人が文化に触れることができることが重要。文化芸術における情報共有が伊賀市全体

	でできてない。高齢者への取り組みもあまり見えない。今後の計画に入れてほしい。 　芭蕉翁生誕 380 年を記念した講演と句会があり、紙芝居を用いて芭蕉翁を紹介した。市外からの人も多く好評だった。今後もこのような活動はできる。需要と供給の情報共有ができればよいと思う。
委員	作品展によく出かけるが、文化芸術に関心がある人は、高齢者が多いと感じる。最近、高校生の作品展を見て、エネルギーを感じた。チャレンジを促したい。 　市展、市民文化祭などの取り組みがあるのに、メディアで発信されていない。行ってみようかなという気持ちを持つことが大切。また、展示だけでなくワークショップも必要。実感して味わうことがよい。体験している子どもたちの顔は、いきいきしている。子どもたちに機会を与えてあげることが大切だと思う。
副会長	年齢層の偏りがある一方、高校生の出品がすすめられているのも印象的。地域の人材をどう引き出すかが大事。
委員	子どものアンケートの回答率は低いが、全員が答えたらもっと数値は低くなるだろう。保護者は生活に必死で、それを責めることはできない。生活体験は大切であり、家庭の中だけではできない体験の機会を小学校や保育園で入れていかないといけないと思う。それぞれで工夫しているつもりだが、さらに工夫が必要だと思った。
副会長	子どもたちへの取り組みを中心として、伊賀市は頑張っていると思っている。これからの広がりについて、プッシュ型についてぶんとから意見はあるか。
事務局	学校アウトリーチは３年目に入り、3/4 の学校へ廻った。福祉領域、企業へでも行っている。その場で空気を作るだけでなく、検証・研究が必要。議論には、行政が横ぐしを指す必要がある。アーティストを学校につれて行けばよいというものではない。今の子どもはとてもナーバスで、学校にも多様性があり、フォローアップも大変である。 　文化芸術には力がある。体験から気づきを得て作用するという流れをシステムとして行っていきたい。伝統工芸士が多くいるから、みんな回れるわけではない。実情を把握することが必要。既存のシステムや要綱などもある。
委員	３年間の積み重ねから、「文化には力がある」と言われたことに同感する。 　企業が必要としているのはＣＳ。これを機能させるためにはＥＳが必要。企業内での理解が深まっている。経営者に理解してもらうことが難しい。企業にとっても利益があることを伝えていければよいのではないか。
副会長	システムが重要。取り組みは単発で終わり、根付かないことが多い。
委員	伊賀市の文化振興に対する取り組みは、すばらしいことができている。一歩一歩進めていけばよい。経済格差により文化に触れられない子どもへのアプローチ、発掘が資料の中で特に大切で、活動の進め方を互いの立場から真剣に話し合うことが大切。実現できるよう取り組みをしてほしい。
副会長	子どもの取り組みはアウトリーチなどがある。企業、中高年へのところにどうつなげていくか、仕組みとして必要。家庭の中で体験をどうつなげるかも大切。自治協などの小さな単位で把握しているので、そことの連携が必要。歴史文化の伝え手として、高齢者の知識を活かすことも必要。

（２）ロゴマークについて

事務局	（２）ロゴマークについて （資料４に基づき、ロゴマークについて説明）
副会長	意見をお願いする。
委員	印象に残ったのは③。下の文字を削除してはどうか。「ぶんか」を「culture」にしてはどうか。
副会長	意見の〆切は、いつまでか。
事務局	次回審議会は、４月以降に予定しており、その際、改めて案を出す。それに間に合うようであれば反映できる。２月末までとする。

（３）伊賀市文化振興プラン後期実行計画について

事務局	（３）伊賀市文化振興プラン後期実行計画について （資料５に基づき、伊賀市文化振興プラン後期実行計画について説明）
副会長	今後、後期実行計画について進めていくことになる。1 人ずつご意見をお願いする。
委員	芸術が議論されているが、生活文化の中にある伝統文化も大切。伝統は引き継いでいかなければならない。そのために後継者問題も計画に盛り込むのがよい。
委員	企業内でも発表の場があればよいと思う。
委員	すべての子どもたちや市民が、文化に触れる機会を得られるよう取り組みを進めていきたい。文化活動を担っている人は団体だけでなく、他の団体がどんな活動をしているか、みんなが一緒に何ができるかを考えられるよう、横の連携をとるべき。
委員	学校に対して、期待を寄せていただいていることを感じた。地域で活動されているものを学校で活用し、活用したことをＳＮＳなど色々な方法で発信し伝えていけたらと思う。
委員	これから先、子どもたちが大人になった時に、文化に触れ受ける感受性をどのように吸収できるか、土台を作るのが私たちの役割だと思う。豊かな生活体験を積み重ねるため、体験の場を保育の中に取り入れていきたい。
事務局	アウトリーチで音楽の体験をした時、子どもがチェロの演奏を前のめりで聞いていた。実働の体験は大きなきっかけとなる。 聞く、見るだけでなく体験することで、将来に繋がる感じられることがあれば、今後の伊賀の人材確保に繋がると思う。自分たちが住む地域のシビックプライドを感じられる企画や文化振興プランができたらよいと思う。
委員	文化振興プランの基本目標に、郷土愛の醸成がある。地域の文化も、体験してこそわかることがある。 人材確保も今回話題となった。人材バンクを持っている社会福祉協議会に集約できたらよい。プラットフォームは一本化するのがわかりやすくてよい。 ロゴマークは、②がよい。印刷した際にわかりやすい白黒のものがよい。
委員	指標は、実行してよかったと思えるようにしなければならない。気づきが大切。気

	付きによりモチベーションや生産性が上がる。その仕組みとして、文化芸術に触れた時のアンケートの交換やシェアで、肯定感の連鎖を作り出していく。否定感の連鎖につながらないよう、その分岐点がわかる指標ができるとよい。
委員	提供側と受け手側は、どちらが提供側、受け手側というのではなく、どちらにもなり得る。評価には、数値化できるものと数値化しにくいものがあり、数値化しにくいものは、どのように評価したらよいか。出会って経験しなければ呼び起こせないものなど、会見的なものもある。計画は評価をしなければならないが、各分野それぞれが持つものを共有し、活かしあえるものを考えられるとよい。文化も大きな力を持っている。各分野で既にあるものを活かして評価の指標とできるとよい。
副会長	多くの意見をいただいた。次回に繋げていただきたい。 他に意見がなければ、以上で議事を終了する。進行を事務局へ返す。

４　その他

事務局	芭蕉翁生誕 380 年記念事業について （資料に基づき、芭蕉翁生誕 380 年記念事業について説明）
委員	芭蕉翁生誕 380 年記念事業の企画は素敵なものが多かった。ガイドブックはとても役立っている。お礼申し上げる。
事務局	他に質問や意見がなければ、以上で令和６年度第３回伊賀市文化振興審議会を終了する。ありがとうございました。 ～終了～